

週刊

循環経済新聞

JUNKAN KEIZAI The Recycling Economy Times

廃塗料の再資源化工場を新築

既存工場と合わせて能力3倍に

環美



井出次男社長

廃塗料を専門に再資源化する環美（本社・埼玉県上尾市、井出次男社長、☎048・780・7766）は、このたび、既存施設と同じ機能を有する「第2工場」を新設し、本格運転を開始した。第2工場は、従来施設の2倍以上の敷地面積となる約600坪の土地に設備を構築しており、同じ領家工業団地内にある第1工場の既設ライン（処理能力・1日当たり9・6立方メートル、ドラム缶換算で48本、3交代24時間稼働）を2基導入した。両工場を同時に稼働させることで、同社の処理能力が従来の3倍になる。

独自開発の安定固化剤「ジェットP」を加えて混練固化し、セメントの原熱料として出荷している。「燃さない・流さない・埋めない」をスローガンに掲げ、焼却によるCO₂排出や残さの埋立処分などを発生させない処理を行ってきた。

同社によると、油性・水性の塗料が混ざった状態でも再資源化できる事業は珍しく、多くの顧客から好評を得ているという。化学反応を用いた混練固化による処理のため、有害物質や重金属が流出しないようになり、その性状や安全性は納入先である大手セメントメーカーからも認められている。

廃塗料の焼却処分に必要な紙くずや木くず、廃プラスチック類などの混焼材の需要が高まっていることから、これまで焼却処分をされていた高含水率の廃塗料について処理依頼が増加傾向にあり、同社は能力を強化することで伸び続ける需要に対応する。

同社はハウスメーカーの建築現場といった、比較的小規模な場所から排出された塗料を主に引き受ける。取引先にドラム缶を無償で貸し出し、その中に廃棄された塗料を同社の車両が回収している。

主に関東地域などの排出に対応していることに加えて、長野県には横替え・保管を行える環美長野（長野県上田市）を構築しており、定期便によって廃塗料を運搬している。

今後については、特別管理産業廃棄物に該当する廃塗料のリサイクル技術開発や許認可取得を目指した取り組みを進めていく。また、北海道の産業廃棄物処理業者と代理店契約を結び、同様の再資源化サービスを開始することも調整中だ。

井出社長は「昨今では含水率の高い水性塗料が使用されることが多くなり、助燃材を多く要するために焼却処分を断る事業者も増えている。また、脱炭素化を意識して単純焼却を避けたがる排出元も現れ始めた。増加し続ける処理依頼に可能な限り対応していきたい」と述べている。



第2工場外観



固化剤の投入・混練固化装置